

第74回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号8番 北海道滝川高等学校全日制（空知支部）

「最後の一人 I am a last man.」 原作：オー・ヘンリー 脚色：にへいこういち（顧問）

一人芝居でありながら、ここまでエネルギーや情熱が伝わってきたことは、「すごい」の一言でしかない。

オー・ヘンリーの短編小説「最後の葉」をもとに創られたこの作品は、役者が自分一人だけとなった劇団員の「鵜飼」と、裏方を一手に引き受けるだけでなく鵜飼に住まいを貸している「太田さん」とが、お酒を飲みながら会話するという情景から始まる。しかし、舞台は一人芝居。役者が演じているのは鵜飼のみであり、太田さんは鵜飼の演技によって巧みに表現され、「実際にそこにいる」という実感(想像)を観客に与えてくれる。

そして、太田さんの鵜飼への愛情、演劇の師であり父のような太田さんに対する鵜飼の想いが、様々なシーンから届いてきた。会話をしている時の鵜飼の手の動きや笑い方のくせなどからも、鵜飼の人物像がにじみ出ていた。鵜飼が太田さんの声真似をするところも、観客に太田さんがどういう人物かを想像させる材料となっていた。

いくつかある場面転換をすべてブルー転換によって見せることで、劇に入り込んだままにするだけでなく、「一人」という寂しさを引き立てる効果があったのではないかという意見が出た。ほかにも劇中劇(劇の練習)シーンを取り入れるなど、一人芝居だからこそメリハリを生んだり、観客が飽きさせないような工夫が施されたりしていた。

劇の中盤、大雨のシーンがあった。強い雨の効果音だけでなく、照明を使って細やかに雨や雷を表現するなど、どれだけひどい雨が降っていたかを想像しやすくさせている。そんな大雨の中、太田さんが「一枚の葉」を描いていたことが後からわかる。鵜飼のことを信じていたからこそ、「演劇を続けて欲しい」と直接の言葉ではなく絵を描くことで伝えようとしたのではないだろうかという意見が出た。さらに鵜飼のもとには太田さんの遺言(遺産)が届く。「こんなことをしてほしかったんじゃないんですよ」と言いつつも、太田さんの父親心に鵜飼の心は動いていく。最後に、鵜飼が

小さな声で「お父さん」と呼ぶシーンからは、じんわりと感動がもたらされると同時に、二人の信頼関係が伝わってきた。

この物語は終始悲壮感でいっぱいだった。初めは太田さんと話す日常。しかし太田さんが亡くなり、後から知ることになる太田さんの優しさに触れて思わず涙してしまう作品だ。何かを「続ける」きっかけというのは、身近な人が与えてくれる。太田さんと鵜飼の心は、演劇を続けてほしいという気持ちと、それに応えようという気持ちで、ずっと繋がっているのではないだろうか。

